

中小企業の挑戦 下町ボブスレー世界へ

2014年6月19日
編集：JAM本部

JAMと日本教職員組合が共同で主催する第4回ものづくり教育シンポジウムが東京の全電通会館で5月25日、開かれた。今回のテーマは、やはり日本を支えるのはものづくりとの認識のもと「ものづくりを育み活かす社会に向けて」と題して、講演やパネルディスカッション、子どもたちを対象にしたにもものづくり体験教室などが行われた。



<中小企業でも世界へ挑戦できる>

下町ボブスレー・世界への挑戦

講演では、ソチオリンピックの時に話題となった下町ボブスレーと東京・大田区の若手のリーダーである細貝淳一氏が登壇し、下町ボブスレープロジェクトを通して地域連携の大切さなど、つぎのような講演を行った。

2001年、ものづくりのまち大田区は1兆円近く出荷があったが、たった10年で5千億を切ってしまった。ここで、中小企業はこのままではいけない、中小企業はせっかくいい技術を持っていてもPRの仕方を知らない。ボブスレーを題材にオリンピックで優勝でもしたら地域の技術力に興味を持ってもらえるんじゃないかと下町ボブスレープロジェクトが始まった。ボブスレーを選んだのはオリンピックに使うような道具で大手が参入していないこと。ボブスレーのボディは炭素繊維で作ることができ、エンジンを積まず坂道を下るだけ。

エンジンを積んでいけば、日本にはトヨタやホンダというスーパー企業があり中小企業が小資本で入れる世界ではない。2011年にプロジェクトを発足したが、中小企業の悪いクセで言ったけど動かない。そこでメディアを集めて記者会見を行い、もう後には引けない状態となりみんな材料費を持ち出しで加工し、部品を持ち寄り、突貫工事で組み立て調整をして、なんと5カ月で1台のマシンを作ることができた。宣伝はできたのでこれからは仕事に結び付けていかなければならない。小資本で大きいことができるということを事実として証明していきたい。

ものづくりを育み活かす社会に向けて

パネルディスカッションでは、4人が登壇。ものづくり教育は、ものづくりに役立つ人材の育成と、ものづくりを教えることで人間を教育することの二つの側面があると提起され、教育現場からは、設備のメンテナンスがほとんどできていないこと、安全管理も学校によって違うこと、一方、ものづくりの現場で働いていた人の指導と姿勢が生徒たちにいい影響をあたえていると報告された。ものづくりマイスターからも学校によって設備に大きな違いがあること、三級で1万円の検定料が半額になればもっと生徒も受けやすいのではないかなどの指摘もされた。会社からは、自社では機械の使用前点検や寿命など全部コントロールしている。一番は相談したいなと思える先生、信頼できる相談しやすい経営者になればいいのではないかと、迷う時には自分が認めた人、感じ入っている人に相談をかける、と表明された。

ディスカッションは最後に、物を作って食っていくという意識がちゃんとあると一生懸命やるということだと思ふ。現場で働きながら、汗をかきながら教育についてしっかり考えていくことが大事だとまとめられた。